

金屋町開町四〇〇年



「ふいご祭」(11月8日)
開町400年を記念し、有隣正八幡宮※(高岡市横田町)の境内において、手動で風をおこす「ふいご」を使い、金屋町の鋳物師たちが白装束で銅鏡を鋳造した。鏡は、この後、仕上げを施され、八幡宮に奉納された。

金屋町は、高岡を開いた前田利長公が、戸出西部金屋から鋳物師を呼び寄せ、住ませたのが始まりである。それが、慶長十六(一六一)年。金屋町は、開町四〇〇年という節目の年を迎えた。この町には、何代も受け継がれる技や町への思いがある。

職人の町、風情のある家並み

木の格子戸を開けると、そこはしっかりととした土間。つやのある上がり^{かまき}櫃、昔ながらの板戸。太い柱には、古時計が時を刻んでいる。金屋町の家には、それぞれが受け継いでいる時の重みがある。「昔は、家の裏に鋳物場があったんですよ」と、自治会長の加藤さんは話す。



加藤 昌宏さん
金屋町自治会会長

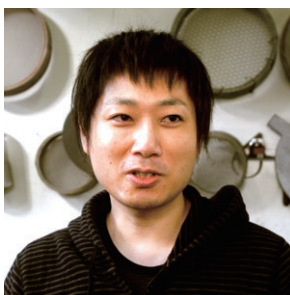
やがて工場は郊外に移り、高岡は新しい町並みへ変わっていく。「でも、金屋町は、まちづくり憲章をつくり、この伝統のある町を守ることを決めたんです。それは、高岡では初めてのことで。近年では、金屋町楽市ゾーンミュージアム展示などの新しい試みにも積極的に参加している。さらには、重要伝統的建造物群保存地区の指定に向けての

取り組みも行っている。「自分たちが先輩にしてもらったことを、次の世代にも同じように伝える。そうやって町も技も守ってきたんです」そこには、金屋町を誇りに思う町の人々の心が感じられる。

新しいものをつくりなさい

風情ある金屋町の家の一軒が、「釜師 畠春齋」さんのご自宅である。畠弘政さんは、平成22年に三代春齋を襲名した。短大で陶芸を学び、ものづくりの楽しさに気づき、卒業後、父のもとで仕事を始めたという。

「まずは、基本的な仕事をしていました。それが、見て覚える期間になりました。



三代 畠 春齋(弘政)さん
平成18年市展奨励賞・県展新人賞。平成19年日本伝統工芸展朝日新聞社賞。平成21年日本工芸会正会員。



平成19年日本伝統工芸展で初入賞した作品。

炉口をキャンパスに見立てて

『どこか優しさがある』と言われる畠家の釜。畠さんの釜だとすぐわかる、た」と、畠さんは話す。30歳になって、父から「伝統工芸展に出す物をつくってみなさい」と言われ、作品をつくり出品したのが、波文様の釜だった。初出品で初入賞。「今まで見たことがなく、模様もきれいだ」と、評価された。「それまでは、まだ出品するレベルではないと見ていたんでしょね。小さい頃から、『とにかく新しいものをつくりなさい』と言われていました」ものづくりは、簡単ではない。出来上がってみるまでは、自分でもわからない。「これまでの経験と感覚でつくっているところがあります」と話す。

※有隣正八幡宮は、天照大神が天の岩戸に隠れたときに鏡を作ったとされる石凝姥神(いしこりどめのかみ)を祀っており、金屋町の氏神として信仰されている。

そして未来へつながる

伝統の技で美しい浄土を再現
関さんは、宗教用具・美術品を取り扱

う会社に、一昨年初、入社した。結婚した相手の父親が社長を務めているため、次代を託された形である。「初めてで覚えることが多かったですね。伝統産業は、独特な部分もありますから」と、関さん。自社商品についての知識、ひとつの商品ができるまでの工程などを勉強していった。実家が寺院で、自身も僧侶の資格を持つている関さん。仏壇や仏具については、考え方や見る目も違う。「仏壇は、浄土なんです。だから、金で光あふれる空間を再現しているんです。そして、仏具は浄土の一部。だから、単に『道具』という感覚ではないですね」浄土にふさわしい、見事な仏具をつくる高岡の職人の技に感心するという。



関 大さん
株式会社 関菊 専務取締役

金屋町のために力になりたい

関さんは、金屋町に新居も構えた。「町並みに合う家にしようと、塗り壁にして、塀にも格子を入れました」そして、昨年は第一子も誕生した。この町が、わが子のふるさとなる。

「縁があつて、金屋町のコミュニティに入れていただいた。次の世代に引き継いでいくために、暮らしやすい町にしたいですね。そのために、お手伝いできれば」と言う。また、伝統産業に携わる一員として、高岡伝統産業青年会にも入会した。新しい商品の開発にも目を向けている。

「皆さんが、懸命に可能性を見出そうとしているエネルギーを感じます。自分も勉強していきたいですね」

そう語る関さん自身が、金屋町の新しい可能性なのかもしれない。

金屋町には、2010年、若手作家たちが制作・展示する空間として、金属工芸工房「かんか」がオープンした。自治会長の加藤さんは、「ここで工房を持ちたいという人もいます。若い人を受け入れるまちでありたいですね」と語る。金屋町には、歴史と未来への意欲がある。そして、ものをつくる人を引きつける、見えない魅力を漂わせている。

(写真上) 金屋町楽市
金屋町の全域を使って、工芸品を展示・販売するゾーン・ミュージアム。2008年から毎年開催している。
(写真下) 金屋町金属工芸工房「かんか」
金工を中心に制作実演と展示・販売を行っている。



「千本格子の家並み」
金屋町の家は、「さまのこ」と呼ばれる格子の美しい町家で、今もそのたたずまいを残している。家並みの保存にまち全体が取り組み、無電柱化、石畳の通りなどの整備を行ってきた意識の高いまちである。

